草花図

冬景図

5　花鳥図屏風　伝狩野永徳　四曲一双

紙本金地着色　桃山時代（十六世紀）

総縦一七一・五　幅三八一・二

現在一双として伝わる本屏風は、左右のモチーフが全く異なり、引手痕が確認できることから、本来は別々の襖絵であったと考えられる。

冬景図の一隻は、雪を載せた檜の枝、飛来する雁、枯れた葦など、冬の池畔の一景を表す。濃群青で描かれる池水は冬の寒さを強調しているかのようである

草花図の一隻は、岩と遠山が配され、芍薬と菊・薄が全体に描かれる中、左半分には射干・金盞花・葦・撫子・野萱草といった春から夏の花が配され、菊花と薄は左側は背丈を低く右側は大きく描く様子から、四季の草花を描いたものの一部と考えられる。

草花図の一隻はすでに「秋草図屏風」（左頁参考図版）として紹介されている二曲一双の屏風と比較して、金箔の色、岩肌や草花の描写が酷似し、構図的に関連性が認められる点から考えて、本来一連の襖絵と考えるべきであろう。「秋草図屏風」の右隻には、根元に竜胆と藤袴を配した背の高い菊と薄を大きく、岩や遠山を小さめとして、秋盛りの様子が表される。一方の左隻は雪をいただく遠山、山々の連なり、岩を中心にして冬枯れの酸漿、菊などを描くが、右端には水仙なども見られ、左から右へと季節が冬から春へ移る様子が窺えている。従ってこの二作品の配置を「秋草図屏風」左隻・「花鳥図屏風」のうちの草花図・「秋草図屏風」右隻とすると、決して連続はしないものの、冬から春、夏、秋と推移する一連の画面〝四季草花図〟が想定できる。

本屏風と「秋草図屏風」も、何れもがその筆者を狩野永徳と伝えて旧桂宮家に伝来したものであり、伝狩野永徳の二件の「源氏物語図屏風」と同様、それぞれが旧桂宮家の邸宅の一室を飾っていた襖絵であった可能性は大きい。

〔参考図版〕秋草図屏風　二曲一双　伝狩野永徳　桃山時代（16世紀）（当館蔵）

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

旧桂宮家伝来の美術――雅と華麗
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 13
編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　大塚巧藝社
翻訳　鶴岡厚生
発行　宮内庁
平成八年九月二十一日発行
© 1996, Museum of the Imperial Collections